

全国大会東京大会 報告

基礎講座

基礎講座には、難言学級経験3年以内の先生方が多数参加していました。

吃音では、国立リハビリテーションセンター教官の坂田先生から「おすすめの書籍」や「吃音の捉え方」「演習」「評価の仕方」「指導・支援の在り方」などについてご講義いただきました。

構音では、帝京平成大学健康メディカル学部教授の山下先生から、構音障害について「評価の仕方」「構音検査の流れ」「実態に合わせた指導」をご講義いただきました。演習では、実際の映像を拝見しながら発声やペロトレを実践しました。

最後に参加者から出た質問にも丁寧にお答えいただきました。



分科会

構音に誤りのある子供への支援

山梨県立大月東小の吉澤先生は顎模型と手作りの舌の模型を使うことで、舌のトレーニングや発音時に舌の位置や形が視覚的に分かりやすくなり、発音指導の成果にも繋がる、ということでした。

品川区立台場小の小俣先生は、相談にいらしたお子さんの表出の少なさが気になり、構音指導を行うことで、退級後に在籍学級で自信をもってたくさん話すようになった、ということでした。

昭和大学歯科病院の武井先生からは、構音指導の評価や分析、発音指導時の舌の形などにおいて注意すべき点について御指導いただきました。

それぞれの先生方から、今後の指導に活かせる内容を教えていただき、成果に繋げていきたいと思いました。

吃音のある子供への支援

実践事例発表は、神戸市立本山南小の桑田先生と、杉並区立高井戸第四小の井出先生が行いました。吃音の評価をどのように行うか、吃音以外のコミュニケーション面をどう評価し指導するのか、本人のニーズ、親のニーズというように、ニーズということばをどのように解釈すればよいかという質問が挙がりました。金沢大学教授の小林先生がこれらの質問をふまえ、「^{つながる}輪」しかけとしての「グループでの学習」や「つどい」、子供を中心に、通級担当教員、支援領域、保護者や担任が「^{つながる}輪」といったお話をしてくださいました。参加者も、吃音を通して、全国の人とつながることができた分科会であったと感じました。

読み書きが苦手な子供への支援

70名近くの参加がありました。一つ目の発表、浜田市立三隈小の上部先生の発表は、児童の興味・関心を大切に、「暮らし」につながり、「暮らし」が豊かになることの視点で支援を行った実践でした。二つ目は、板橋区立志村第三小の市之瀬先生の発表で、詳細なアセスメントに基づいた指導と自己有能感を高める支援、また家庭、在籍学級担任との連携も含めた報告でした。最後に、東原先生の講演では、輪：つながるは、「相互作用がある」「終わりが始まりで何度も繰り返す(See.Plan.Do→See...)」「どんどん増強される(WHO,ICFモデル)」とのお話があり、今後、支援を行う上での指針をいただくことができました。



発達障害を併せ有する子供への支援

多くの参加者が集い、盛会の内に終了することができました。実践事例発表は、渋谷区立神南小の薄先生と羽村市立松林小情緒学級の上山先生が行いました。「情緒学級が巡回になることを、現場の保護者や教員はどのように受け止めているか」や「通常学級でできる発達障害の児童への関わり方」等の質疑応答がありました。講演をされたどんぐり発達クリニックの宮尾先生は、医学的な視点から発達障害の特徴と付き合い方についてお話をされていました。「走り回る子には、走り回らなくてはいけない理由がある。」と先生がお話される場面がありました。なぜ子供はそのような行動をとるのかを医学的な根拠をもとに、より理解していきたいと思いました。

難聴のある子供への支援

90名を超す参加者が全国から集まり、熱い議論のうちに幕を閉じることとなりました。高知市立介良小の小松先生の実践事例は、通常の小学校における難聴児への教育に対する愛と情熱に満ち溢れたものとなりました。府中市立住吉小の本間先生の事例発表では聴力等の客観データに基づき一対一の丁寧な指導を通して、会話を成立させることに成功した経過が明示されました。講演して下さった東京学芸大学教授の濱田先生は、地域によって難聴学級の制度が全く異なること、2016年度に発効される障害者差別解消法や今後のインクルーシブ教育から考えて、今後は通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校が「輪～つながり～」を作って子どもの支援にあたる必要があることについてお話しくださいました。新生児聴覚スクリーニングが浸透し、35dB以上の難聴児が乳児期から発見できるようになりました。軽度難聴や人工内耳装用児では、音韻の聞き取りや発音の明瞭度は上がります。しかし、同障の仲間づくり、また言語力の向上という大きな課題については教育の場が必須です。難聴教育の重要性、私たちの役割の重さについて、深く考えさせられた会となりました。

言語発達に遅れのある子供への支援

約70名の方のご参集の下、質疑応答を交えながら、盛会のうちに終えることができました。

宮城県富谷町立富谷小の芳賀先生からは、子供を育てていく基盤として学校を位置づけ、医療や福祉関係者とも協力しながら環境を整え、支援を行っていった過程を発表していただきました。東京都足立区立千寿本町小の山田先生からは、コミュニケーション上の課題とLSCAの結果を照らし合わせ、評価を具体的な支援方法へ展開していった事例について発表していただきました。

ご講演をいただきました東京学芸大学の林先生より、子供のことばの発達を支えていくためには安心して過ごせる場や子供の思いを受け止める大人の存在が必須であり、更には個別指導にとどまらず社会的な場へつなげていくことが大切であるとのお話をいただきました。

在籍学級との連携の在り方について

テーマに基づいて、前半に2つの事例発表を行い、後半はその発表についての質疑応答と講師の講評並びに講義が行われました。事例の1つ目は、三重県津市立修成小の辻先生が行われました。ある吃音児の在籍学級との連携に関してのエピソードをもとに、連携における課題を提示されました。2つ目は、東京都北区立赤羽小の堀越先生が「読み書きが困難な児童への支援」をもとに、自校通級を中心とした、早期発見・支援可能な校内体制の構築や他校の在籍学級との連携の在り方について課題提起なされました。

最後に、講師である国士舘大学文学部教育学科教授の金子先生より、「児童に寄り添う指導の重要性」「専門機関との連携」「児童に対して効果的な合理的配慮とは」以上3つの視点からの発言がなされ、盛会のうちに会は終了しました。

パネルディスカッション

難聴がある子供の書き言葉の力を高めるために

テーマのもと、盛会のうちに終了することができました。

まず東京都立葛飾ろう学校の菅原先生が乳幼児期のころについて、東京都八王子市立第四小の笠井先生が小学校のころについて、東京都台東区立柏葉中の山口先生が中学校のころについて、きこえの教室の卒業生が卒業生の立場から話してくれました。ディスカッションの中では、保護者へのサポートや情報提供、意図的に日本語を教える、障害認識について意見交換が行われました。

コーディネーターの濱田先生より、社会に出たときに自分の意志を伝えられる力を獲得してほしいとのお話を伺いました。パネリストやコーディネーターの先生の話より、早期からの一貫した教育、生涯を見通した教育のつながりの大切さを感じました。

読み書きが苦手な子供を支えるための連携

世田谷区九品仏小の奥山先生、墨田区立押上小の我謝先生からは読み書き障害の子供を見付け、指導していく過程について、中野区立谷戸小の京極先生からは学級担任としてどう読み書きが苦手な子供と向き合い、指導するかについて、前渋谷区特別支援教育相談員の木下先生からは中高生への支援についてお話をいただきました。原恵子先生は、大会テーマ「つながる輪」と関連して横や縦のつながりを意識した支援についてお話しください、ことばの教室における今後の支援の重要性を感じました。



医療と学校教育のつながりで保護者と子供のニーズに応える

240名の参加者が集い、盛会のうちに終了することができました。

パネリストは慶応義塾大学病院耳鼻咽喉科言語室言語聴覚士の浅野先生、調布市立第一小の佐貫先生、口蓋裂でことばの教室通級経験があるお子さんをもつ保護者の3名のパネリストが、それぞれの立場から話を進めていきました。

コーディネーターのNPO法人こどもの発達療育研究所顧問長澤先生より、構音指導などの知識とともに、児童とのコミュニケーションの大切さを話していただきました。指導を進めていく上で、医療機関、保護者、ことばの教室との連携がいかにか必要かを感じました。

吃音がある子供の支援で大切にしたいこと

パネリストは、吃音があるお子さんをもつ保護者の方、ことばの教室の白濱先生、金沢大学教授の小林先生、コーディネーターは、国立障害者リハビリテーションセンター学院の坂田先生が務めてくださいました。参加者は約200名、前半は各パネリストからの事例発表。北里大学東病院の吉澤先生は体調不良で欠席されて、坂田先生が代わりに吉澤先生の資料について発表してくださいました。後半は参加者から出た質問を中心に支援の際に大切にしたいことについてディスカッションが行われました。

様々な立場から支援の具体的な方法について話し合われました。最後に、支援で大切なことは、①考えや思いを受け止め、寄り添う②どもることは悪くない③親子だけでなく、周囲の人の吃音に対する正しい理解④話し方だけにとらわれない⑤一人で悩まない⑥今できることを誠実に行うことであると坂田先生がまとめてくださいました。今回、お話を伺い6つのことを常に大切にしながら今後指導にあたっていこうと思いました。